



カンボジアの子どもたちに教科書を

2012年 3月 No. 40

カンボジア便り

新しい年度の教科書支援が動き出しました

新しい年度に入り、昨年から支援している全11校の要請に応じて教科書の補充支援を行っています。11校で4,177冊、金額は3,912ドルになります。現在6校分の購入を完了し、そのほかの学校でも順次購入を進める予定です。

ワットハー小学校に関しては、日本の震災以降、現地の判断で自粛していた洪水で被害を受けた文房具類援助とあわせ、459.40ドルの支援を行う予定です。ワットハー小学校は、洪水で大きな被害を受けながらも、当会からの支援額をできるだけ減らすために、他校から教科書を借りて書き写したり、少しでも使えそうなものは乾燥させて使用するなど、学校側の前向きな努力が多く見られました。

教科書に関しては、ルセイサン小学校、ワットハー小学校ともに言えることですが、小学校6年生の教科書の回収率が非常に悪いことが分かりました。

理由としては、今年政府が6年生の教科書の一部を改訂したこと、ならびに6年生が小学校最後の年なので、子どもたちが試験直前まで教科書を持っていたがため回収が遅れ、卒業してしまうと学校に来ないので回収不能になるという事情があるようです。



教科書を手に嬉しそうな子どもたち
(登校の途中です)

～目次～

カンボジアだより

教科書支援	1
幼稚園の再開支援	3
スタッフ紹介	3
ボランティアさんの感想から	4
年賀状宛名書き・ニュースレター 発送作業・文京国際フェスタ	
第16回ビビンの会	7
事務連絡	8

今後の課題として、再発の予防に努めていきたいと思えます。具体的には、カンボジアスタッフのリティさんから、全校長に対して教科書の管理と回収に関してしっかり対策を取るよう伝えてもらっています。

支援の成果としては、昨年同様、子どもたちが学校に行くのを楽しめるようになった、家でも勉強ができるようになった

など多くの反響をいただきました。

写真の女の子（Sok Sreyrov）は小学校 5 年生で、「教科書がなかった頃は、授業を休むと次の日に先生に前の授業のことで質問されるのが怖くて学校に行けなかったが、今では教科書が手元にあるので、家で教科書を読んで理解できないことは友達に教えてもらうことができる。家で教科書を読むのが楽しい」と言っていました。



Sok Sreyrov ちゃん

ルセイサン幼稚園の再開を支援しました

新しい年度になり、ルセイサン幼稚園が閉園されていることが分かりました。理由は、教育省から送られるはずだった幼稚園専門の先生が来なかったためです。

また、以前にも問題となったことですが、小学校の先生は、授業や模擬試験などの対価として、子どもから小額のお金を日常的に集めてガソリン代の足しなどにしており、それができない幼稚園では教えたがらないという問題も幼稚園の再開を困難にしていました。

これに対して、当会では先生の給与を支払う形で支援を行うかどうか、慎重に検討しました。その過程で、ルセイサン幼稚園の卒業生が実際に小学校に入って、どのようにしているのか追跡調査を行いました。当会の支援の目的どおり、幼稚園に行くことで小学校での落第率の低下など目に見える成果が上がっているようであれば、幼稚園の支援は、子どもの数に関わらず継続してやっていく価値があると考えたためです。

結果はルセイサン幼稚園や別の幼稚園に行っていた子どもは、小学校に入ってから柔軟性があり、動物・果物の絵やパズルの組み立てなどの理解が早い、簡単な読み書きができる、挨拶の仕方を心得ている、など多くの点で幼稚園に行っていない子どもたちより優れていることが分かりました。

また、次頁別表のとおり、11 月に行われた試験の結果では、幼稚園卒業生の平均点が 86.5 点であったのに対し、幼稚園に行っていない子供の平均は 59.6 点と、幼稚園での学習の成果が見て取れました。



幼稚園の再開を喜ぶ子どもたち

以前のように先生をしっかりと用意できるよう取り組んでもらっています。

このようなことから、当会では閉園状態だったルセイサン幼稚園を再開するため、先生の採用と給与の支援を行うことを決定し、以前にもアジア未来学校（当会が経営していた非正規識字学校）で教えていた Chantha さんという方を幼稚園の先生として採用しました。

再開した幼稚園は、当初 10 人ほどだった生徒も現在は 25 人程度まで増えてきています。一方で、先生との契約は当面 1 年間とし、校長をはじめ地元の人たちに、

最後に、昨年から支援を開始している学校 No.9 の識字学校にも黒板の支援を行いました。(市井)

ルセイサン小学校1年生の昨年11月の成績 (出身幼稚園別)						
出身幼稚園	生徒数			平均成績 100点満点		
	男	女	合計	男	女	男女平均
ルセイサン幼稚園	9	8	17	85	88	87
私立幼稚園	8	0	8	86	-	86
直接入学	22	15	37	57	63	60
合計	39	23	62	70	71	71

考察

- ・就学前教育の効果は明確である。
- ・この表からは読み取れないが、上位25位は幼稚園出身者で占められている。
- ・男女の生徒数がかなり違うことは問題である。→リティさんに問い合わせ中。
- ・男女の成績は女子がやや良いと言える。

(合計では差が小さいが、これは私立幼稚園が男子だけであることが影響している)

- ・今年10月の2年生進級状況に注目したい。

なお学年1位は、ルセイサン幼稚園出身の女の子 Mao Rima ちゃんで成績は96点です。

スタッフ紹介

福岡県出身で、タイ王国バンコク市内に15歳(～1997年)まで約5年間生活したことがあり、日本とは異なる文化や社会に接する機会のある環境で生活しながら、海外にかかわる活動に何かのかたちで貢献できればと思っていました。また、学生時代から文化祭実行委員会や企画研究会といった団体で活動したことがあり、社会人になってもビジネス、IT、国際交流、国際協力などのイベント、セミナーに参加していました。同時にボランティア活動にも興味を持っていました。

新卒のときIT業界を志望し、将来たとえば金融や医療、公共系といった分野で経験を積んだ後に、インフラやIT・テクノロジー、システムに対して国内外で、または国際協力のようなかたちで貢献をしたいと思っていました。上述した各分野について短期間、派遣社員としての場合もありますが、携わることができ、広い意味で国際的に展開するような業務にも携わりました。日韓アジア基金では微力ですがIT・情報システム周りのことならのお手伝いをさせてもらっています。

現在30歳になり、ベンチャー企業にて主にIT関連の製品担当エンジニアまたはSales Engineer(技術営業)職に転職し勤務を開始したばかりです。色々と未熟な部分もあり将来について悩むこともあります。皆様との活動や日韓アジア基金での地道なボランティア活動、貢献を通じてでもよりよい社会への一歩を踏み出すことにつながるきっかけになればと思っています。また自己成長を実現できればと思っています。

佐々木望(会社員)



年賀状宛名書き

「顔の見える」関係を築いていくこと

菊池礼乃(NGO 職員・元当会スタッフ)

2011年末、8か月ぶりに勤務先のあるタイから一時帰国し、当会の年賀状書きに参加しました。ご支援者の皆様のお名前を一人ひとり確認しながら、宛先、メッセージを書きましたが、長年に渡ってご支援くださっている方も多く、知っているお名前を見かけるたびに、「〇〇さんは、元気にしていらっしゃるかな？△△さんには、あのイベントで講演していただいた」と、お世話になった皆さんの顔を思い浮かべていました。

私は、昨年3月末からNGO職員としてタイとミャンマーの国境で働き始めましたが、働き始めて間もなく、それまで気がつかなかったあることをひしひしと感じるようになりました。それは、団体や支援事業を応援して下さると同時に、新米NGO職員である私自身を応援して下さる方々がいらっしゃるということです。家族や友人、以前の勤務先の同僚、そしてこれまでのボランティア活動で知り合った方が、私への応援も兼ねて、所属先の団体に支援して下さることがありました。自分が学生の頃や一般企業に勤めていた時も周りの方々に随分支えられていたと思いますが、目に見える形で応援していただく機会はこれまであまりなかったもので、感謝すると共にとても身が引き締まる思いをしています。

これまで、NGOのスタッフは事業目標達成のために陰ながら支える黒子のような役割を果たすものだと思っていましたが、今は考え方が少しずつ変わり、事業内容や活動成果だけでなく、自分が事業に携わる中でどのようなことを考えているのか、どのような経験をしているのかをもっと伝えて、「顔の見える」関係を築いていくことが大切ではないかと思うようになりました。

もちろん自分で責任を取れる範囲で情報を発信することは忘れてはいけないと思いますが、そうする過程の中で、私自身をもっと頂き、人と人が繋がる形で団体とも信頼関係を結ぶことができるのではないかと考えています。

日韓アジア基金の活動でも、カンボジアでの教育支援事業、日韓交流に関心を持ってご支援くださる方が沢山いらっしゃいますが、中には当会のスタッフを通して団体を知り、「この人が頑張っているなら、活動を応援しよう！」ということで、ご支援くださっている方もいらっしゃいます。これは、各々のスタッフが「顔の見える」付き合いの中で築き上げてきた信頼によるものだと思います。そして、このような信頼は、間違いなく現在の日韓アジア基金の団体としての活動を支えています。年賀状書きを終えて、お世話になっている皆さんの顔を思い浮かべながら、改めて日韓アジア基金は支援者の皆様に支えられていると感じると同時に、私個人としても、日韓アジア基金を通して出会った様々な方とのご縁を大切に、もっと「顔の見える」関係を築いていけるように努力していきたいと思いました。



難民キャンプの子どもと

他人のために自分の時間を使うこと

古川りさ子(社会人)

ずっと自分のことで手いっぱい生きてきましたが、そろそろ人のために時間

を使う時期なんじゃないかと思ひ立ち、ボランティアを探すことにしました。初めてだったので、アルバイト経験のある「宛名書」に飛びつきました。祖父がコリアンだったため、日韓交流に興味があったことも応募の一因です。

正直いいますと、最初は宛名ラベルの方が早いのになぜ？と置いていたんです。でも当日、「手書きで1枚1枚書いた方が、“繋がり”ができる」というお話を伺い、納得の思いでした。効率の良さや、合理的なやり方を選択することも、それはそれで必要なこと。けれど、効率・合理性をすべての物事のものさしにしてしまうのは、かえって勿体ないことだと思ひ至りました。最近読んだ本に「非効率なものが感動を生む」と書いてあったことも思ひ出されました。

終わってみて、どうして今までボランティアをやってこなかったんだろう？と思ひました。何か気が重いことという思ひ込みがあったのかもかもしれません。もちろん、苦境に立つ方々のために活動する過程には、気が滅入るようなことや体力的にきついこともあると思ひます。でも、自分にもできることはあるとわかりましたし、人のために自分の時間を使う気持ちよさも知りました。これからも、できることを見つけてやっていきたいと思ひます。

ニュースレター発送作業

初めてのボランティア

折田千幸（学生）

私は、今回初めての参加で、とても緊張しながら集合場所へ向かいました。自己紹介の後、すぐニュースレターの発送作業にとりかかりました。宛名シール貼りをしたり、お礼状を書いたり、みんなで楽しく作業を進めていくというより、一人ひとり集中して自分の与えられた仕事をこなしている姿がとても印象的でした。

袋詰めをしている時に、全国各地の方々が日韓アジア基金の主旨に賛同し支援してくださっていることに気づきました。支援してくださっている方々やスタッフの皆さんの熱い思いがカンボジアへの支援を支えているのだなと感じました。私も、少しでも貢献できるよう積極的にボランティアに参加していきたいと思ひています。

「支援」と「絆」のスタートライン

北村宏大（会社員）

私と日韓アジア基金の出会いは今から2年前…。年末の年賀状宛名書きボランティアがきっかけでした。当時の私は暇つぶしの感覚で漠然と参加していたのが実情で、参加動機までが迷走気味でした（笑）。日韓両国が協力して東南アジアを支援するという「一方的」なものなど当時の自分にはどこか絵空事のような気がしていました。そして時は過ぎ、2011年3月、東北地方太平洋沖地震が発生しました。先進国ゆえに専ら「支援」する側と思われた我が国ですが、あの日、地震大国という脆さがかつて無いほど露呈したことで状況は一変したのです。

一時的な帰宅困難や食糧不足、ライフラインの制約という日常生活を送ることが困難な状態を余儀なくされ、「支援」されることのありがたみを肌身で実感したのは私だけでしょうか。当会のニュースレターを通じてカンボジアの方からお

見舞いの言葉を頂戴したことや韓国ポペラのチャリティーコンサートを開催したことも記憶に新しいです。大震災は「支援」とそこから生まれる人の「絆」の大切さを我が国の身近な問題としてクローズアップしました。依然として大地震への恐怖と隣り合わせの日本、日韓両国間に立ちはだかる歴史の問題、地球温暖化を背景とした東南アジアの洪水や干ばつなどの異常気象など、アジア地域に山積する問題は数知れません。「支援」とは、決して一方通行ではなく、様々な人々のそれぞれの思いが行き交う幹線道路であるということを踏まえながら当会の活動に励んでまいりたいと考えております。

文京国際フェスタ

小さな活動が大きな支援に

高橋宏幸(会社員)

2月某日、文京区国際交流フェスタでは、在住外国人と区民との相互理解と交流を深めるため、日本人でも体験する機会が少ない伝統文化(茶道や折り紙など)を体験したり、留学生による自国紹介講演会が開かれるなど、国際交流が学べるとてもいい経験ができました。当日は、学生や留学生、社会人など、多くのボランティアメンバーが参加し、沢山の考え方や価値観に触れることができました。そして、テレビの取材にも取り上げられるほどの目立つ宣伝 T シャツを着用し、楽しくボランティア活動ができました。

このような沢山の小さな活動が大きな支援に繋がり、カンボジアの子どもたちの教育の糧になり、子どもたちの輝ける将来に役立てればいいなと思います。

ひとりひとは微力でも

齋藤乃章(会社員)

去る2月18日(土)に文京シビックセンターにおいて開催された文京国際交流フェスタ。日韓アジア基金はこのイベントに広報ブースを出展し広報及び募金活動を行うと共に、主催者の要請に基づき韓国茶の販売をしました。

ステージでは神楽や謡曲、フラダンスなどの出し物が絶え間なく続き、それとともに来場される方も増え、一時は立ち見客で通路が一杯となって歩くのもままならない状況でした。来場されたお客様は老若男女、日本人だけでなく、韓国人や中国人から欧米の方々まで幅広いお客様がお見えになっていました。私はブースの裏側でお湯を沸かしてポットに入れ替えたり、ジャムやお湯の手配などを行いました。韓国茶は、会場でほっと一息つきたい方たちには手軽な飲み物として大変好評でした。午後にはお客さんへの声かけや冊子の手渡しなどをしました。

今回のボランティアを通じ一番の収穫は「目に見えるボランティア」ができたことです。募金や支援活動は世の中に多くありますが、それがどのように使われているのかは実際よくわかりません。それに反し、たとえ1日であったとしても、この活動が直接カンボジアの子どもたちの教育支援になることを実感できたことは、私にとって貴重な経験でした。また同じ目的の人たちが集まり活動したという連帯感は、普段収益を上げることが至上命題の一般企業に勤めるものとして非常に新鮮でした。ひとりひとは微力だけれどやれば何かを変えることはできるんだなあと思いました。

第16回ビビンの会

リピーターに感謝しつつ

高藤里紗(スタッフ・学生)

2010年12月23日、ビビンの会を開催しました。東日本大震災の影響でビビンの会も中止し続けてきましたが、リピーターの方や韓国の友人たちからの声もあり一年振りの開催となりました。募集期間が短かった上、震災の影響で韓国人留学生が未だ少ない状況で、人が集まるのかとても不安でしたが、韓国人も日本人も予想を超える募集があり、とても嬉しく思いました。

グループごとにティータイムを楽しみ、最後はメインイベントであるグループディスカッション。これは、グループごとに議題を決めて、その議題に沿った話をグループリーダーを中心に時間内に進めていき、書記が話し合ったことをまとめ、最後の発表時間に代表が前に出てきて発表する、というのが一連の流れです。今回は今までに出たことのないような議題ばかりで、交流会らしい日本語とハングルの勉強方法の差異について、震災について、お正月について、SNS（web上の交流サイト）について等がありました。定番となりつつあるのが恋愛についてです。私自身ビビンの会に参加し始めたのが高校生の時だったので、かれこれ2年半が経ちますが、恋愛に関連したテーマの発表を聞けなかったことはなく、そう考えるとビビンの会は高校生からリタイアされた方まで幅広い（およそ3世代にわたる）年齢層のお客様がいらっしゃいますが、どんな世代の方でもやはり恋愛事情は気になってしまうのだな、と感じました。

また、何よりも今回感銘したことは、発表者の“熱意”です。発表時間は各グループ5分と決められているのですが、今回は5分を大きく上回る発表者が続出！白板を使って学校の授業のように進めたり、本物のディスカッションのような形式で発表したりと、発表者の熱心さと様々な工夫には驚きました。結局、会の終了時刻もだいぶ押し延ばしましたが、タジタジになりながらも誰一人嫌な顔せず最後まで聞き遂げました。



今回、今まで気づけなかったことに気づきました。一つはこのビビンの会がいかにリピーターのお客様に支えられているかということ。リピーターが参加されるだけでなく、

お友達を誘って来たり、会の最中もスタッフがいなくて中心となって進めてくれているので、私たちにとってはとても大きな存在です。そしてもう一つは会を重ねるごとに様々なことが少しずつ進歩しているということです。毎度同じようなことをしていても、その中に新しい発見があったり、ハプニングがあったりします。そしてそのお陰で今、このビビンの会がここまで成長できたのだとしみじみ思います。今年はまだ通常通り年4回の開催を予定しています。今後とも皆さまよろしくお祈りします。

当会イベントにボランティアスタッフとして参加下さった方(敬称略・五十音順)

2011年12月4日 ニュースレター39号 発送作業

折田千幸・高田果林・有馬美代・池田記子・安藤友歌里・荒谷早紀・新井利延・佐々木望・北村宏大

2011年12月25日 年賀状宛名書き

浅井小百合・奥山莉絵・北村宏大・千葉まゆみ・長澤桂・西地理子・古川りさ子・ユーファヨン

2012年2月18日 文京国際交流フェスタブース要員

池田裕子・李允貞・長田宏子・上村祥太郎・斉藤乃章・高橋宏幸・田畑千博・張欣舫・百嶋友美・築田沙紀・山浦春香・ユーファヨン

2011年11月27日～2012年2月23日に会費・ご寄付を下さった方

敬称略・五十音順(別枠除く)

大塚 紀子	篠原 功	塚本美和子	古川起與子	森 健造	吉崎 玲子
大坪 玲子	高柳 直正	長島 和子	堀場 秀亨	八坂 涼子	若宮 康夫
語ろう会	高柳 直正	中田 邦雄	松井ふみ子	柳田 文子	渡辺 京子
金子十三松	田中 慶子	中村 節子	丸山美津子	山口 忠正	渡部 澄江
黒巢 香	丹下 誠司	並木 陽子	丸山 芳彦	山崎 杜子	
佐藤 和之	チラタ会	藤井 陽子	満井 啓二	兪 和暎	

日本聖公会 川越キリスト教会

細川 武・敦子

マールツァイト 白井 幸子

ご入会・ご寄付のお願い

活動会員:年会費 5,000円(学生、未成年者 2,000円)

賛助会員:年会費1口5,000円(学生、未成年者 1口2,000円)

法人会員:年会費 1口10万円

ご寄付:2,000円以上おいくらでも

<郵便振替口座>

口座番号 00180-2-25153

口座名 日韓アジア基金

・活動会員:活動に積極的にご参加頂ける方。総会での議決権があります。

・賛助会員:定期的にご支援頂ける方。

ご支援下さった方には「日韓アジア基金ニュースレター」をお届けします。

<お問合せ先> (日本語でお願いします)

〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-12-13 アジア文化会館(ABK)内

Tel:090-4456-2942(庶務・会計担当 大澤) FAX:03-3946-7599(ABK)

E-メール: ilaf@iloveasia2.sakura.ne.jp

HP: 検索サイトで「日韓アジア基金」で検索なさって下さい。

発行人 特定非営利活動法人 日韓アジア基金・日本 代表理事 江本 哲也